

# 積算四方山話③

## 見えないベテランの技

野呂 幸一

公益社団法人日本建築積算協会 名誉会長

### 積算課長の技

どこの会社にもベテランと呼ばれる人がいるが、私が新入社員として配属された積算課にも多くのベテランがいた。積算一筋20年、30年のキャリアを誇るベテランは、長年の経験によって技を磨き、自分のためだけの独自の技を有し、その技を他の人に伝えることはほとんどなかった。

当時の積算は、建築数量の積算基準もパソコンもなく、半ば徒弟制度によって技術が伝承されていた。この技術は属人的であり、人によって様々な解釈を生み、積算についても考え方や手法に違いがあった。

私が配属された積算課の課長は、積算歴が最長のベテランであり、その技は他のベテランにもよく分からなかった。課長は、みんなからは「おっちゃん」と呼ばれ、その積算手法が時々話題となるが、誰も正しく説明できなかった。容姿は、短身短足肥満はげ頭であり、年齢は不詳で独特の雰囲気を持っていた。

日常の積算業務においては、課長が次席と相談して担当者が決められていた。積算課には、男性が50名ぐらいいたが、次席は課員のすべての作業状況を把握していた。

当時、建設会社の積算課員は、建築系の3%と言われており、たまたま当社の人数を調べてみると、建築系は、約3,500名でその3%のおよそ100名が積算係であった。私の所属していた積算課は、本店ということもあり、その半数が在籍していた。残りの半数は、各支店に配属されており、支店で手に負えない物件が発生した時は、本店から応援部隊が出張することで対応していた。出張者は、1人から数名程度であったが、期間は

長いと1ヵ月になることもあった。

積算は、物件毎にグループリーダーが選任された。リーダーは、仕上げ積算のベテランが多く、中核となって積算を行うが、このリーダーのもとに躯体と仕上げの担当者が集められ、それぞれの担当者が作成した見積内訳明細書をリーダーがまとめていた。まとまると値入の担当者に回すことになるが、その前に課長のチェックがあった。

このチェックはすさまじいもので、私たち課員は「裁判」と呼んでいた。この「裁判」が始まるのが終業時刻の5時以降であり、終わるのは深夜か朝方であった。

通常の日に残業はなく、5時に終業ベルが鳴るとほとんどの課員が机の上を片付けて帰宅できていた。実は、個人の机はなく、自分のソロバンや筆記道具は、適当に机の引き出しに入れていた。

机は、大きな木製で向い合わせに並べられていた。この机の拭き掃除は新入社員の役目であり、毎日始業前に出勤して雑巾で拭かされた。いい加減に拭くと、乾いた時に埃が白っぽく浮き上がり、先輩たちから怒られた。

この大きな机は、図面を広げるのに好都合であり、グループが設定されると、ソロバンと定規を持って集まり、その都度空いた机で行っていた。図面は、1部だけのことが多かったが、机の真ん中に置いてみんなで共用した。そして、先ほど触れた「裁判」であるが、課長はリーダーと担当者を自分の机の前に座らせて行うのだった。担当者は担当した工事毎に呼ばれ、土工事から始まり、躯体工事、仕上げ工事へと進む。呼ばれない担当者は、少し離れたところで待機していた。

「裁判」が始まり、1、2時間もすると、他の課員はほとんどが帰宅しており、部屋は静寂に包

まれた。新人は建具工事と雑工事を担当するため、課長の前に行くのは、いつも最後の方であった。それまでは、課長の机の前でチェックを受けている先輩たちを見ていた。

課長は、頭の上に畳んだ濡れタオルを乗せ、太い指でソロバンを弾きながら紙切れに何やら数字やメモを書いていた。また積算数量を始め、明細書に記載されていればどんな小さい数字もチェックし、図面上にあればどんなことでも確認していた。そして明細書の積算数量や文言に間違いがあると必ず指摘された。しかし、どうして間違いが分かったのか、その方法は誰も理解できなかった。

長時間に及ぶ「裁判」をこなす課長のスタミナにも驚かされるが、そのチェックの技は、神がかりと言えるものだった。

よって、「裁判」が終わると、課員は自分の作成した見積内訳明細書に自信が持てたのである。

## 次席の技

次席も大変なベテランであり、その技は課長以上に分からなかった。

当時は、戦後20年の頃であり、次席を含めて戦争経験者が多く勤めていた。彼らは、酒席では戦争の話で盛り上がり、私などは黙って聞くばかりであった。

次席の年齢は課長同様不詳であったが、ある時、定期券を見せられ、年齢は44歳と記載されていた。しかし本人は、「自分は、これ以上歳をとらないことにした。定期券は、ずーっとこの歳だ」と言って笑っていた。

次席は、グループリーダーとなることはなかったが、物件によっては、一人で躯体工事の積算をしていることもあった。足を組み、貧乏ゆすりをしながらソロバンを黙々と弾き、計算書に数量を書いていたが、この時、記載される数量は、部位毎の合計数量だけであり、計算に要する寸法などの記載は、一切なかった。

積算課に新しい物件が持ち込まれると、そこそこの規模や形状をしている時は、積算をする前に鉄筋の重量を当てる賭けが行われることが度々あった。次席の呼びかけで何人かのベテランたちが、図面の前に集まり、独自の概算方法で鉄筋量を算出し、紙に数量を書いて入札を行った。後で精算された積算数量に最も近い者が勝者となったが、勝つのはいつも次席であった。他のベテランは、今回こそはと自信のある数量を入札したが、いつも次席に負けて悔しい思いをしていた。次席はどうやって計算したのか、他のベテランには見当がつかず、不思議極まりなかった。

## 三角定規の技

内訳明細書の作成は、積算課課員の重要な仕事であるが、字体は誰にも読みやすく分かりやすい字が第一に求められ、字の下手な人にとっては苦手な作業と言えた。

初心者の作成する明細書はどこかぎこちないものだが、ベテランの明細書は個性のある字で書かれていても、どこか風格があり、様になっていた。

そんなベテランの明細書の中で肉筆とは思えないような字体で書く人がいた。それは、字の縦横の直線が真っ直ぐに書かれており、読みやすかった。

ある時、この人が明細書を書くところを盗み見することができた。左手に小さな三角定規を隠し持っており、真ん中の空いた丸に人差し指を差し込み、字を書くときに人差し指でチョコチョコ三角定規を動かし、これに右手を合わせて字の直線部分を素早く書いていた。

不思議に思い、どうしてそんなことをするのか聞いてみたところ、「自分は大変な悪筆で明細書を綺麗に書けないんだよ。そこで三角定規を使って何とか読めるようにしているんだ」とのことだった。

やがて、ワープロが主流となって、字の下手な人も救われたが、当時の積算課課員にとっては、悪筆は致命的な欠点であり、この欠点をカバーしようとするベテランの技には感心させられた。